

ひと
女と男の広場

ねとねと

NO.21

目次

| | |
|----------------------|----|
| 特集 今、魅力ある女性とは・男性とは…… | 2 |
| ◇男の魅力、女の魅力…… | 6 |
| ウォッチング…… | 8 |
| ぐる～ぶねっと…… | 10 |
| 情報誌あれこれ…… | 12 |
| 国際プラザ…… | 13 |
| 本だな…… | 14 |
| シフォン…… | 15 |
| 編集員紹介…… | 16 |



静岡県

看護は一生の仕事



富 士 市
西田英明さん

高校卒業後、病院で働きながら学べる准看護学院へ入学。それは、経済的自立と、資格も取得したいと考えた西田さんの選択でした。

「その当時、看護師のイメージは一般的でなく、女性の社会で働くことに多少の抵抗と不安はあった。でも二年間学んで、人と接することができ、たえず正しい判断と応用を要求されるこの仕事は、やりがいがある。看護に男も女も関係ない。」と思われたそうです。その後、看護学校で二年間学び、正看護師の資格を取得し、現在、富士市立中央病院の集中治療室に勤務されています。

この病院で、西田さんが以前実習生として勤務したとき、患者さんをケアする心配りが当時の総婦長さんの目に止まり、それがき

かけて、消極的だった看護師の受け入れが実現したそうです。

「男とか、女とかでなく、求めるものは人間性。彼は、看護に責任を持っている。看護師のバイオニアとして与えた影響は大きい。」と総婦長さんは話されています。現在、看護部約三〇〇人中看護師は五人。各科の要望も増え、今後積極的な採用を考えているそうです。

西田さんは、看護師として十年、臨床工学技師の資格も取得されるなど、仕事に対する姿勢は、常に前向きです。医療が進歩すれば、現場のケアだけでなく、複雑化する器械の操作や修理等、技術の修得も必要になります。そのために、「その日の仕事はその日のうちに、限られた時間を大切に」を持論に、絶えず努力を怠っていません。共働きの奥さんも看護師です。また、二人の御嬢さんの子育ては、人格を尊重し、性差は考えないで育てたいと語ってくれました。退院する患者さんに、「ありがとう、今度は町で会いたいね。」と言われ、「看護に生きがいを感じ、一生の仕事だと実感した。」そうです。夜勤明けの疲れも見せず、接する人に優しさと安心を与えてくださる誠実な人柄が印象的でした。

「やさしさ」を持って



焼 津 市
飯島諭依子さん

「人間、いつ死ぬかわからない。」「若々しく明るい表情の飯島さんから、さりと意外な言葉が返ってきました。八年前お母さんをお通いで交通事故で突然亡くされてから、とにかく後悔しないように生きていと思われているそうです。

二人のお子さんと一緒に手話を習い、現在はそのサークルの会長をされています。また、自宅の一室を近所の子供たちに文庫として開放してきました。さらに、今年から市のホームヘルパーの研修を受け、十月から正職員としてスタートします。時間を無駄にしない飯島さんの積極的な姿勢が感じられます。

世の中で一番大事なのは「やさしさ」、でも今まではやさしさを誤解していたとおっしゃる飯島さん。

手話やヘルパーの仕事を通して、相手の自立を妨げないよう本人ができることは手を貸さないという、きびしさを含んだ「やさしさ」でなければならぬと思われたそうです。

女らしさ、男らしさについて、「このごろ、男性女性という観点から人を見たことがないので分かりません。」と申し訳なさそうに答えられました。「男性女性、それに障害者などの枠に関係なく、みんな同じ人間。当たり前のことですが。」と言われる飯島さんの透明な心を垣間見た思いでした。

そんなお母さんを支えるのは十二歳のお嬢さん。家事は頼まなくても助けてくれるそうです。十六歳の息子さんも身の回りのことは一人でやり、将来は福祉の道へ進みたいと自分で決められているそうです。お母さんの「やさしさ」は着実に子供さんに受けつがれているようです。その飯島さんが、「夫はやさしい人、最も尊敬しています。」と言います。

やさしさに包まれた家庭があるからこそ、飯島さんの温かい雰囲気が生まれるのでしょう。そして、それが周囲をやさしく、明るいものにしてくれるのだと思います。

自分をもっている人が魅力的



静岡市
漆畑多恵子さん

「人皆それぞれの生き方があり、自分なりの生き方をしている人だったら、女も男もなく魅力的に見える。そんな人がみんな好き。」とおっしゃる漆畑さんは、航空会社という職場を足がかりに、広い視野に立って自分を表わせる仕事を捜したという、広いフィールドを持つている方です。その時々々の仕事への全力投球とその評価によって、仕事がさらに大きな仕事を呼び、現在の接遇の派遣講師や日本語教師、通訳などの幅広い仕事に至っています。自分のライフスタイルに合わせて仕事を選び、忙しい中でも子供さんに「お母さんが一番、ひま」と言われるというぐらい仕事も生活も自然体で、精神的なゆとりを常に持っていらっしやいます。

自分の生き方を曲げられるのが嫌で、結婚か仕事かといったら仕事を選ぶと言っていた漆畑さんが結婚されたのは、相手を認め、その生き方を尊重し、お互いに一番よい状態になれるようにと努力し合えるパートナーと出会ったからだそうです。好きで続けている仕事の途中で結婚があった、とおっしゃっています。

あくまで主体的に生き、自分というものを大切にしているからこそ、他人に対しても良いところを見いだし、魅力としてとらえることができるのでしょうか。

「経歴や肩書きではなく、ありのままの自分を見てほしい。一仕事は、私でなくてもほかの人でも代わることができるけれど、私が体験し実感したことは、この私が何らかの形で行動に移していかなければ……。」と、常に自分の心に耳を傾けることを忘れず、多方面で活躍していらっしやいます。

その考えの基本には、日本人も外国人もなく、もちろん女性も男性もなく「人間としてどう生きていくか」という指針があり、そしてそれを行動に移すことができる漆畑さんは、とても魅力あふれる方です。

情熱と行動力で



浜松市
鈴木克子さん

鈴木さんは、公立幼稚園の園長先生です。十八歳で幼稚園に就職。当時は、教員の資格なしに就職できませんでした。が、「子守りのお姉さんではいけない。」と、短期大学の夜間に通い、資格を取得しました。その後、幼稚園や幼児教育が分かりはじめた三十代からが、本当の幼稚園教諭としての出発だったそうです。

「遊び」が絶対必要。それが一番大切。夢中に遊びに興ずるという単純な行為の中に、その子の生活背景や人生観もが表われてしまう。もし、周りのものを歪んで見ていたら、真正面から見るように導き、自分を素直にはっきりと表現できる人間に育てることが幼稚園の役割だと思う。」と熱っぽく続けられます。そんな子供や幼稚園に対する情熱と持ち前の行動力が、今までに数々の斬新な改革を可能にさせてきました。

そして、鈴木さんを支えてきたのが御主人です。「物事を一方だけでなく、他方から見ることが主人は教えてくれた。」と。息子さんが思いがけない職業を希望されたときにも、動じないで対処した御主人の態度に敬服したそうです。尊敬する御主人が、鈴木さんのパワーの素になっているのでしよう。「ずっと働き続けてきたけれど、家族との調和が下手で、いくつもの失敗をしてきた。この自分の失敗をもとに、皆に助言ができる。」と話されます。良いと思ったことは積極的に言う反面で、こんな謙虚さを持ち合わせた人柄が鈴木さんの大きな魅力なのだと感じました。